



### ～仕事と介護編～

## 仕事と研究と介護の日々が 教えてくれたこと。

#### 当時の状況について

当時は複数の大学で非常勤講師をしていて、3つの異なる職場に片道2〜3時間かけて通勤していました。そんな中、父が急遽入院し、五年一ヶ月間、母と交代で父のお見舞いのために病院に週に二、三回通いました。

父が入院した当初、私は大学院の博士後期課程に在籍していたため、フィールドワークをして博士論文を執筆しなければならぬ状況でした。博士号を取得できたのですが、非常勤講師の仕事と自分の研究と父の介護の両立は大変でした。

父はずっと入院していたため完全看護であり、家族はお見舞いに行つて、食事介助をしながらおしゃべりをしていました。寝たきりではあったものの、意識ははっきりと

#### 介護と仕事の両立について

していたため、「家族とおしゃべりしたい」というのが、父が求めていたことであつたと思います。おしゃべりとは、相手が誰でもいいものではなく、親しい人とするから楽しいものであるため、看護師さんや介護士さんにはできないことが、おしゃべりの相手だつたと思います。

当時、私も母も働いていたため、父の年金を介護費用に費やせたため、介護にかかる費用のために家計が経済的に破綻することはありませんでした。また、仕事があつたからこそ、介護でたまるストレスを仕事で発散できていたのだと思います。このような、公的な社会保障制度を活用できて家計が経済的に破綻しないこと、介護者が介護に専念せずに仕事を持つこと、介護から離れた

自分の時間を持つことが、介護の継続のためには必要だと思ひます。

介護経験を通じて感じたことは、「家族の決断の重み」でした。入院直後やその後何回か、父が意識不明に陥り病状が悪化するたびに「治療を続けるか否か」「どんな医療を求めするのか」などについて、母と私は父の主治医と面談し、母と私が最終的に決定しなければなりません。悪化する病状を直視し、家族としての決断を迫られることが精神的に重い負担となつていました。

そして、介護が育児とは大きく異なるのは、「介護が終わる時は家族の死と向き合う時」だということです。少しずつ衰えていく姿に寄り添い、見つめ続けることこそが介護であり、それはお別れのための長い時間でした。

#### 当時の仕事以外の生活について

介護をしていた五年間は、旅行や友達と会うような、社交や趣味を削らざるを得ない日々でした。親の介護を私は30代前半から経験したのですが、同世代の友達に介護の悩みを相談したくても、経験者が誰もいないため相談できませんでした。出産と子育てに邁進し、「生」の喜びに浸っている友達に、「死」と向き合う介護の辛さを語ることははばかられたため、相談相手は同じ辛さを分かち合う母だけでした。

#### 学生に向けて

介護に専念するために仕事を辞めてはいけません。自分の生活費を自分で賄い、介護から離れた自分の時間を確保してストレスを発散し、自分の人生を破綻させないためにも、仕事は必要です。

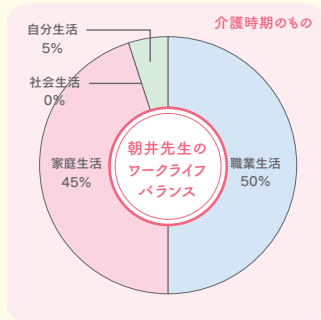
年金、健康保険、介護保険制度、高額



愛媛大学法文学部 准教授

### 朝井 志歩 先生

#### ワーク・ライフ・バランスの割合 ++++++



医療費還付制度など、公的な社会保障制度について調べ、制度は最大限に活用しましょう。

介護を通して気づいたのは、「老いた親の介護をする生き物は、人間だけだ」ということです。人間が人間となつてきた過程の中で、病んだ者や老いた者を見捨てず労わる文化が育まれてきた理由に思いをさせ、介護という過酷な日々を乗り切ってください。